

など（全員で七十人）を引き連れての避難行を決めました。牡丹江からの列車はもうありません。

牧場と乳製品の工場がある海林（ハイリン）の工場まで行くことに決めました。（荷物はまとめて会社に置いたままです）

主人は一行を送り出し、残務整理のために会社に残り、私たちは、三歳の次女を背負い、一歳の三男を抱いて、胃潰瘍でやっとおかゆ食になつたばかりの長男の足を気遣いながら、昼ごろに出発しました。

途中、開拓団の女性たちに出会いました。奥地から牡丹江へ出るまでに頭は丸坊主にされ、衣服をはぎ取られて、アンペラ（ゴザの一種）一枚を身体に巻いただけの気の毒な姿でした。男性も子どもも見当たりませんでした。

広い道一杯、避難民の列で埋め尽くされています。

上空には真つ黒い飛行機が、轟音を響かせながら低空で旋回しています。まるで映画の一シーンのように思えました。日本兵は一人も見かけませんでした。白系ロシアの騎馬兵多数に守られながら、人波に押されて歩いていました。見兼ねたのか、どこからか馬車を調達してきて、私たちを乗せてくれました。

夜八時ごろ、やっどハイリン到着。主人は先に到着していて安心しました。ハイリンの社員三人と、その家族十三人が待っていて下さいました。

早速、ご厚意のおにぎりを頂いてホッとする間もなく「これが最後の避難列車ですよ」と、せかさされて全員貨車に乗り込み、吉林（キツリン）

へ向かうことになりました。

朝からの緊張と過労から主人が卒倒、しばらくして意識を回復し、安心しました。

食糧はもちろん、手荷物も途中で一つ、また一つと捨てて、何もありません。ハイリンで頂いた毛布は、雨のためビショビショで、重いので捨ててしまいました。

列車の両側は、火を放って逃げたとかで、火の海でした。興奮したのか、発作的に赤ん坊を火の中に投げ捨てる母親も次々いて、地獄さながらでした。

飲まず食わずで貨物列車に揺られ、途中で日本の「敗戦」を知らされて驚きました。主人はやむなくハルピンの工場まで引き返すことを決意して皆に告げました。

▽ああ敗戦！